

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和2年度病虫害発生予報第11号(2月)について

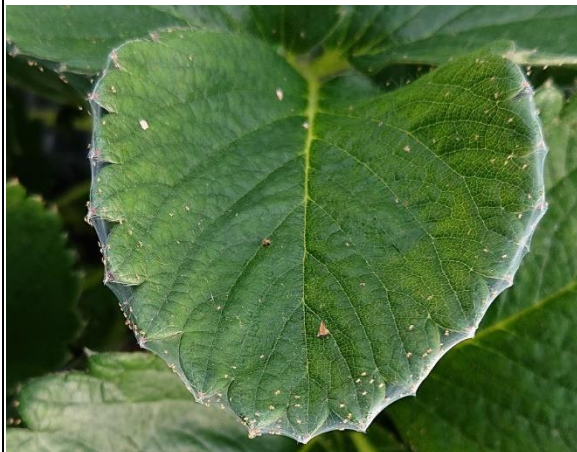
このことについて、病虫害発生予報第11号を発表したので送付します。

予報第11号

冬春イチゴの害虫についてご注意を！

12月中旬以降の気温は低く推移したにもかかわらず、1月の予察調査では、ハダニ類やアブラムシ類の寄生株が平年より多く確認されました。今後の気温は平年より高いと予想されており、害虫の多発が懸念されます。

害虫は多発すると防除が困難になるので、発生状況に注意して適切に防除しましょう。



ハダニ類の多発でクモの巣状の糸が張った葉



アブラムシ類

<予想される向こう1か月の天候(令和3年1月16日~令和3年2月15日)>

平年と同様に曇りや雨または雪の日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は、寒気の影響を受けにくいいため高く、特に2週目は、かなり高くなる見込みです。

向こう1か月の降水量と日照時間は、ほぼ平年並の見込みです。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並30 高50% 平年より高い見込み	少40 並30 多30% ほぼ平年並の見込み	少30 並30 多40% ほぼ平年並の見込み

(福岡管区气象台 令和3年1月14日発表抜粋)

2月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	2月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
冬春ナス	灰色かび病	やや多	やや多	やや多
	うどんこ病	多	多	やや多
	すすかび病	少	少	並
	ミナミキイロアザミウマ	少	やや少	並
冬キャベツ	菌核病	並	並	少
	黒腐病	やや少	やや少	並
	コナガ	並	やや多	やや多
冬レタス	灰色かび病	並	並	—*
	菌核病	少	やや少	—*
	腐敗病	多	やや多	—*
冬春イチゴ	灰色かび病	並	並	やや少
	うどんこ病	やや少	やや少	並
	ハダニ類	やや多	多	多
	アブラムシ類	並	やや多	やや多

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

※暖冬で生育が早まり、前年データがとれなかったため、「—」としています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

【野菜：冬春ナス】

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～＋）。

発病果率 0.4%（平年 0.03%、前年 0.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 適切にハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

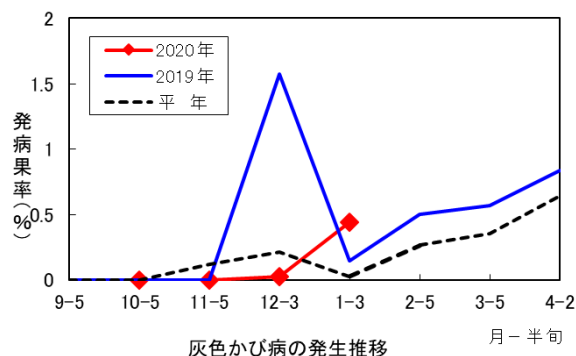
イ 発病果、発病葉等はできるだけ除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

ウ 不用な枝葉は除去、処分し、通風、採光をよくする。

エ 病勢が進展すると防除が困難であるため、初期防除を徹底する。

オ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

カ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 8の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉率 3.9% (平年 0.6%、前年 0.3%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 適切にハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

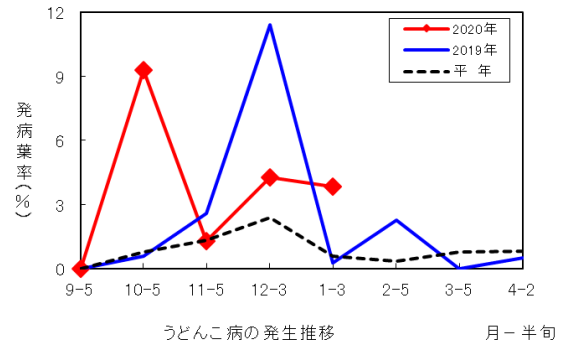
イ 発病葉等はできるだけ除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

ウ 不用な枝葉は除去、処分し、通風、採光をよくする。

エ 株の過繁茂や窒素過多により発病が助長されるため、適切な肥培管理に努める。

オ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

カ 病勢が進展すると防除が困難であるため、初期防除を徹底する。



3 すずかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発病葉率 5.1% (平年 11.4%、前年 10.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹勢が低下すると発病が助長されるため、適切な肥培管理に努める。

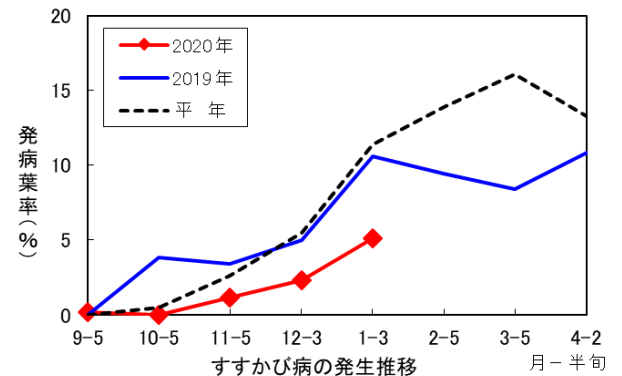
イ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

ウ 不用な枝葉は除去、処分し、通風、採光をよくする。

エ 病勢が進展すると防除が困難であるため、初期防除を徹底する。

オ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

カ 多湿にならないように換気に注意するとともに、ほ場の排水対策も心掛ける。



4 ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生葉率 0.7% (平年 7.8%、前年 0.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 増殖源となるハウス内外の雑草を除去する。除去し

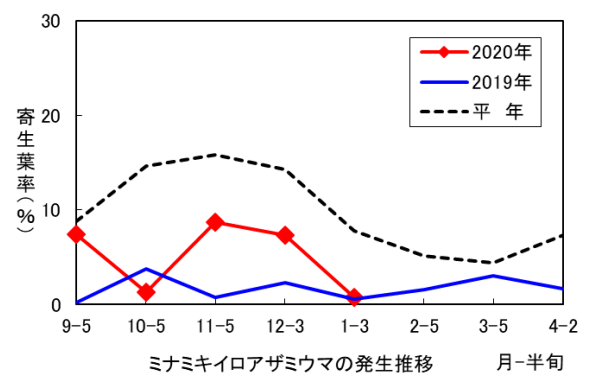
た雑草や摘葉した葉はハウス内に放置せず、ほ場外へ持ち出して処分する。

イ 防虫ネット(目合い0.4mm以下)を展張し、定期的な薬剤散布を実施する。

ウ 発生初期の防除を徹底する。

エ 天敵を導入しているほ場では、天敵への影響が大きい薬剤は使用しない。

オ 葉裏への寄生が多いので、散布ムラがないように丁寧に薬剤散布する。なお、薬剤抵抗性の発達を回避するために、同一系統薬剤の連用は避ける。



【野菜：冬キャベツ】

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病株率 2.0% (平年 1.6%、前年 1.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

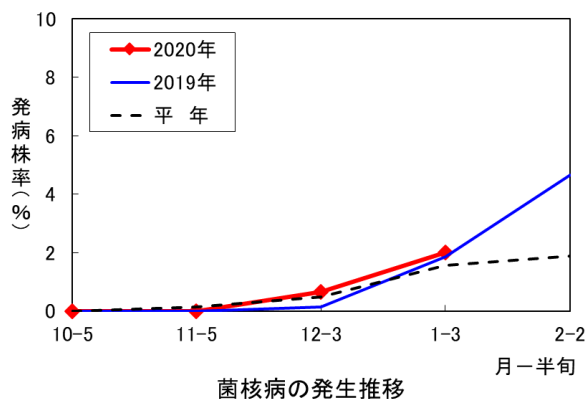
(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病株は菌核を作らないうちに周囲の土ごと掘り取り処分する。

イ 薬剤を散布する場合は、株元に十分かかるように、丁寧に散布する。

ウ 発病株が確認されたほ場は、収穫後に反転耕を行い、5 cm を超える深さに菌核を埋没させる。

エ 次作での発生を低減させるために、多発ほ場では水田転換や夏期の湛水、輪作を行う。



菌核病の発生推移

2 黒腐病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-~±)。

発病株率 0% (平年 1.2%、前年 0%)

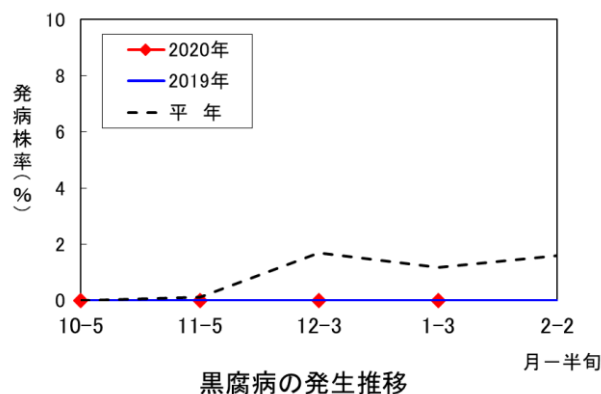
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 予防散布に努める。

イ 発病株を見つけたら、早めに除去、処分する。

ウ 多発ほ場では、アブラナ科以外の作物を輪作する。



黒腐病の発生推移

3 コナガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 1.0% (平年 0.3%、前年 0.3%)

発生ほ場率 16.7% (平年 11.3%、前年 14.3%)

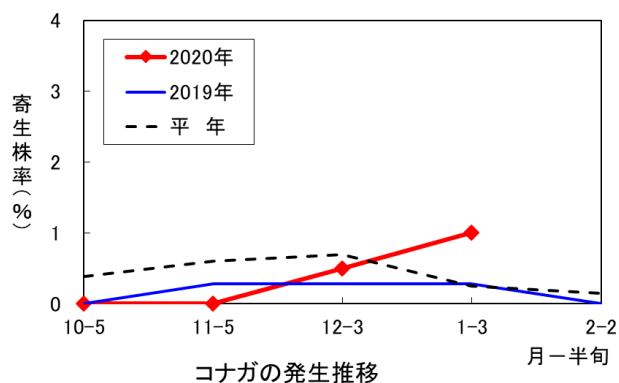
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ほ場の発生状況に注意し、発生初期の防除に努める。

イ 一部のジアミド系薬剤で感受性が低下している個体群が確認されているため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ ほ場への侵入源となるアブラナ科雑草の除草を徹底する。

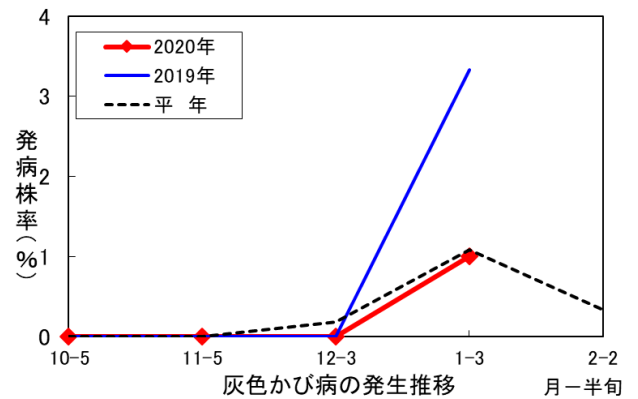


コナガの発生推移

【野菜：冬レタス】

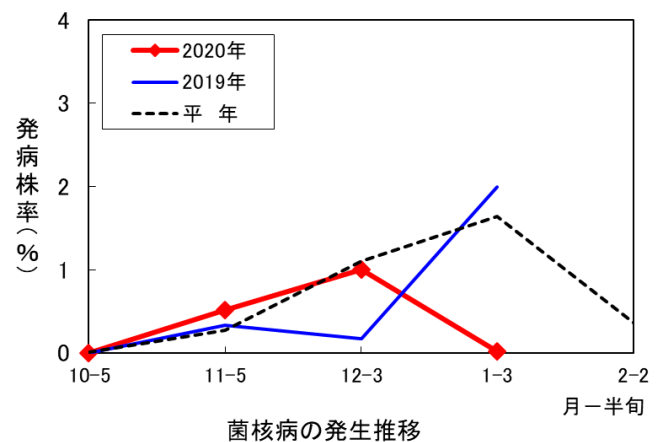
1 灰色かび病

- (1) 予報の内容
発生量：平年並
- (2) 予報の根拠
ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
発病株率 1.0% (平年 1.1%、前年 3.3%)
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている(±)。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 発病株は抜き取り処分し、直ちに薬剤散布する。
イ トンネル被覆後は、高温多湿にならないようにこまめな換気に努める。



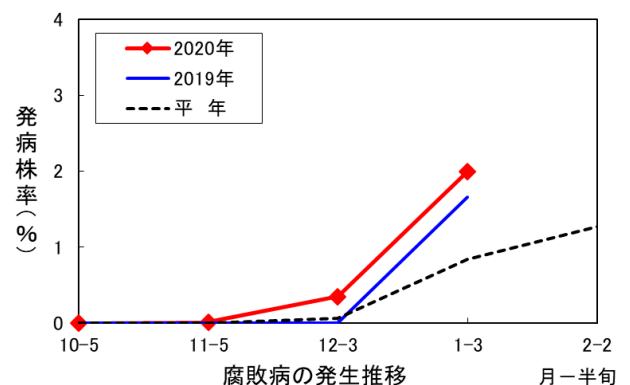
2 菌核病

- (1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少
- (2) 予報の根拠
ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。
発病株率 0.02% (平年 1.6%、前年 2.0%)
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている(±)。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 予防的に地際や葉の基部を主体に薬剤散布を行う。
イ 発病株は菌核をつくらないうちに周囲の土ごと掘り取って処分し、灰色かび病との同時防除を行う。
ウ トンネル被覆後は、高温多湿にならないようにこまめな換気に努める。
エ 発病株が確認されたほ場は、収穫後に反転耕を行い、5 cm を超える深さに菌核を埋没させる。
オ 次年度対策として、圃場を水田化するか、夏期の高温時に20日以上湛水する。



3 腐敗病

- (1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多
- (2) 予報の根拠
ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)
発病株率 2.0% (平年 0.8%、前年 1.7%)
イ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている(±)。
- (3) 防除上注意すべき事項
ア 発病株を見つけたら、早めに除去、処分する。
イ トンネル被覆後は、高温多湿にならないようにこまめな換気に努める。
ウ 収穫が遅れると本病が突発することがあるので、適期収穫に努める。発生ほ場では早めに収穫する。
エ 排水が悪いほ場や多雨の年に発生が多い傾向があるので、ほ場の排水を図り、水田裏作では高畝にする。



【野菜：冬春イチゴ】

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.03% (平年 0.03%、前年 0.14%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 適切にハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

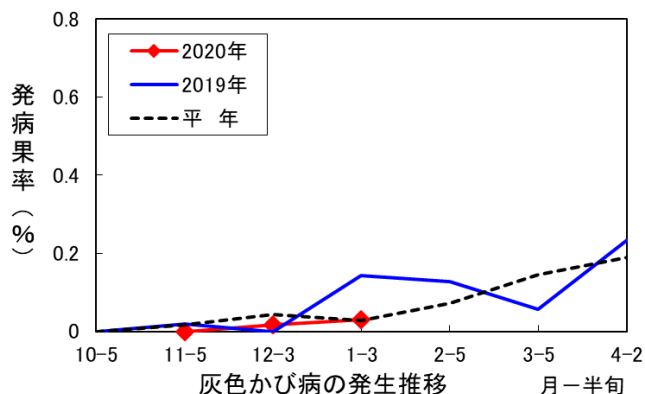
イ 罹病果や罹病葉の早期発見に努め、見つけ次第速やかに取り除く。

ウ 収穫後の果梗枝は、放置すると感染源となりやすいので、早めに取り除く。

エ 病勢が進展すると防除が困難となるため、初期防除を徹底する。

オ 株元まで薬剤がかかるよう、丁寧に薬剤散布する。

カ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

発病株率 0% (平年 0.1%、前年 0.14%)

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 適切にハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

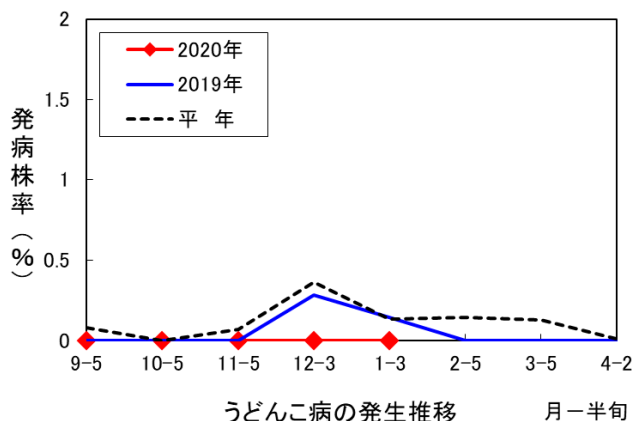
イ 罹病果や罹病葉の早期発見に努め、見つけ次第速やかに取り除く。

ウ 収穫後の果梗枝は、放置すると感染源となりやすいので、早めに取り除く。

エ 病勢が進展すると防除が困難となるため、初期防除を徹底する。

オ 不要な下葉は早めに除去する。防除は下葉かぎ後に行うと効果的で、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

カ 同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±~+)。

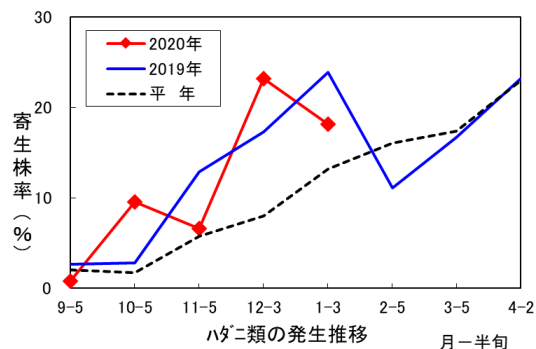
寄生株率 18.2% (平年 13.2%、前年 23.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウス内の雑草は、除草を徹底し増殖源を絶

つ。除去した雑草や摘葉した葉はハウス内に放置せず、ビニル袋等に入れてほ場から持ち出



- し、処分する。
- イ 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。なお、防除は摘葉後に行うと効果的である。
 - ウ ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性に乏しいため、必要に応じて展着剤を加用し、葉裏に薬剤が十分かかるよう、丁寧な散布を心がける。
 - エ 薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連続散布の連用は避け、気門封鎖剤も含めて、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
 - オ 気門封鎖剤は、卵に効果が低い剤もあり、残効性も短いので、連用する場合は約7日間隔で複数回散布する。
 - カ ミツバチに影響が少ない薬剤を使用する。
 - キ 天敵を利用している場合は、天敵に影響が少ない薬剤でハダニ類の密度を低下させ、天敵を放飼する。ただし、ハダニ類が多発して天敵を主体とした防除が難しい場合は、殺ダニ剤を中心とした化学農薬による防除に切り替える。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 1月3半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

寄生株率 4.9% (平年 1.6%、前年 5.6%)

ほ場発生率 23.1% (平年 26.6%、前年 35.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

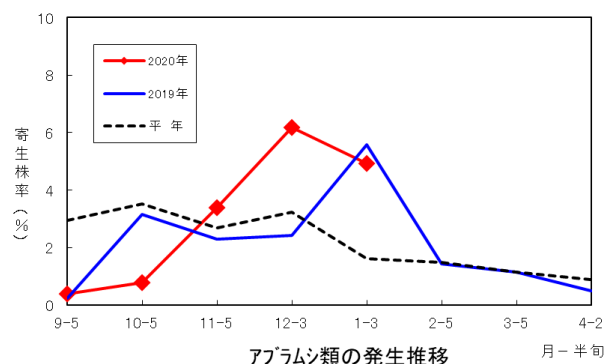
(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウス内外の除草を徹底し、本虫の増殖源を絶つ。

イ 若い葉や未展開葉、花蕾、果房などに寄生していることが多いので、寄生部位に薬液が十分付着するよう薬剤散布を行う。

ウ 発生初期の防除を徹底する。また、薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ ハダニ類等に対する天敵を導入しているほ場では、天敵への影響が大きい薬剤は使用しない。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。

携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。

